

ダニエル書第 11 章の研究

—ヘレニズムと衝突するユダヤの宗教アイデンティティ—

佐 藤 友 梨

はじめに

以前、中国大連の国際色豊かな環境で働いていた。そこでの経験から、「異文化を受容するとき、そこには限界性が存在するはずだ」という考えに至った。例えば、現地の狗食の習慣に対して「狗肉を食すれば、自分のアイデンティティが崩れるのではないか」と追い詰められた¹。しかし、この拒否感の言語化は困難であった。そこには自然科学的根拠がなく、己の価値観からきていた忌避感しかなかったからである。そこで、この言語化し難いものを、言語化しようと試みる。異文化を受容する際、ある種の価値観—非合理的判断—に基づいた取捨選択もある。しかし、その限界を越す時には、人格を形成するアイデンティティが崩壊する危機に曝される場合もある。このような限界を、本論では「境界線」と呼ぶ。

序

本論文は、「ヘレニズムにおけるユダヤの異文化受容の境界線」の解明を目的とする。

ヘレニズムとは、J. G. ドロイゼン²の提唱した歴史概念である。アレクサ

¹ 狗食を受容する日本人もいた。日本の歴史において、狗食を確認することもできる。しかし、現代日本においては「イヌは食用ではない」という価値観が存在する。

² J.G.Droysen (1808-1884 年) ドイツの歴史家。古代史家として「ヘレニズム」の歴史概念を樹立した。

ンドロス大王の東征以降、多数の都市国家が征服地域に建設された。その際にギリシャ・マケドニア人の植民により、オリエント世界のギリシャ化が際立った³。ギリシャ化していく中でオリエント世界は、どのように境界線を引いたのであろうか。

この問いに直接答えるものではないが、パレスチナにおける興味深い事件がある。アレクサンドロス大王の遠征（前 334—323 年）からおよそ 160 年経たユダヤ⁴に起こったマカバイ反乱である。この頃、パレスチナはセレウコス朝シリアに支配されていた。特にアンティオコス 4 世の治世で、ユダヤに対し強硬なギリシャ改革が推進された。改革の波はユダヤ共同体の根幹を成していた宗教面にまで及んだ。これに対し厳格なユダヤ教徒は、武力を以てセレウコス朝に抵抗した。これがマカバイ反乱の始まりである。この事件は「ユダヤがギリシャ文化を受容するか否か、決断を迫られた事件」⁵として捉えることができる。

そこで、マカバイ反乱の背景から、ヘレニズムにおけるユダヤの異文化受容の境界線を模索していきたい。ここで問題となるのが一連の事件のどこに焦点を絞り、どのように境界線を導き出すのかである。まず、ユダヤの中でもアンティオコス 4 世の迫害に深く関わり、この時代を特徴付けることが可能な集団を特定することであろう。また特定集団の保有している史料があれば、その史料から彼らの精神性を読み取り、境界線を類推していきたい。

第 1 章 問題の所在

前 332 年にアレクサンドロス大王によりパレスチナが征服され、ヘレニズム

³ アレクサンドロス大王以前から、ギリシャとオリエントの間に一定の文化的・経済的交流があったことは認められている。

⁴ バビロン捕囚後、エルサレムに再建した神殿を中心としたユダヤ教団が成立し、彼らはユダヤとよばれるようになった。西暦 70 年ローマ帝国によりエルサレム神殿が破壊され、世界各地に離散した。

⁵ 大戸千之『ヘレニズムとオリエント』ミネルヴァ書房、1993、277-278 頁を参照。

時代が始まった⁶。

アレクサンドロス大王の死後、パレスチナはエジプトを中心としたプトレマイオス朝の支配下に置かれる。他方、セレウコス朝シリアもコイレ・シリアの支配権を巡り、プトレマイオス朝との争いを繰り返した。前 200 年頃、セレウコス朝はパレスチナの支配権を獲得し、セレウコス朝による支配時代が到来した⁷。

セレウコス朝にアンティオコス 4 世エピファネス⁸【図 1】が即位したのは前 175 年である。ユダヤはアンティオコス 4 世の治世期において、社会制度をはじめ、文化的にも宗教的にも強硬なギリシャ改革を経験する。具体的な例として、エルサレムにおける^{ギムナジウム}体育競技場や^{エフェベイオン}青年訓育場といったギリシャ風の建設物の建立が挙げられる。神殿にギリシャ系のゼウス神を祀り、ギリシャ式の祭儀が導入したことは迫害の極みとされる。こうして、アンティオコス 4 世の君臨したセレウコス朝は、ユダヤ共同体のアイデンティティを危機に曝した。このため、アンティオコス 4 世はユダヤ教の伝承において迫害者と解釈される⁹。

このような時代背景をふまえて、第 1 章では問題の所在を明らかにしたい。

第 1 節 研究概要

問題の所在を明らかにする為にまず、どのような集団を扱うことが適切かを検討する。そのために、マカバイ反乱を主導した集団に焦点を当てる。

前 168 年、アンティオコス 4 世によるエジプト遠征の時にパレスチナの状況

⁶ ヘレニズム時代のユダヤ史は大きく 3 つの時期に分けることができる。プトレマイオス朝支配時代（前 301-200 年）、セレウコス朝支配時代（前 200-142 年）、ハスモン朝時代（前 142-63 年）である。年代の区分に関しては、以下を参照した。H.G. キッペンベルク、奥泉康弘 / 紺野馨訳『古代ユダヤ社会史』教文館、1986、141 頁

⁷ プトレマイオス朝とセレウコス朝の間で起こった戦争をシリア戦争と呼ぶ。シリア戦争は第 6 次まで行われている。柴田広志「シリア戦争をめぐる考察」『古代史年報 4』11-16 頁、属州研究会、2006。を参照。

⁸ Antiochus IV Epiphanes（在位前 175-164 年） セレウコス朝第 8 代シリア王である。

⁹ アンティオコス 4 世の治世において行われたユダヤ教徒のアイデンティティを危機に曝した一連の事件を、アンティオコス 4 世の迫害と呼ぶ。

は一変した。ローマの干渉に屈服し、セレウコス朝は征服目前であったエジプトへの侵攻を断念した。これは、反セレウコス勢力を力付けることとなり¹⁰、エルサレムでも反乱が起こった。それに対し、アンティオコス 4 世は武力を以て対処した。のみならず、ユダヤ教徒にゼウス崇拜を強制し¹¹、迫害が開始された¹²。

このような状況の中、武力闘争によってセレウコス朝からの解放を目指したのがマカバイ党¹³である。彼らの知能顧問的役割を果たしたのが、敬虔派^{ハシディーム}¹⁴と呼ばれる宗教集団であった。マカバイ家と敬虔派^{ハシディーム}の関係に関して、一致した見解はない。しかし、両者は反セレウコス朝派という一点で結ばれていたと考えられる¹⁵。

次に史料に関してである。どのような史料が適切なのか。この時代を記した歴史書として、ハスモン朝時代に成立したマカバイ記一・二¹⁶がある。それに

¹⁰ M. ヘンゲル, 長窪専三訳『ユダヤ教とヘレニズム』日本基督教団出版局, 1983, 32 頁を参考。

¹¹ マカバイ記二 6 章 1-11 節, マカバイ記一 1 章 54-64 節を参照。

¹² マカバイ記二 5 章 11 節-7 章 42 節, マカバイ記一 1 章 20-64 節を参照。

¹³ マカバイ党は、後にセレウコス朝から独立したハスモン朝を立てるマカバイ家によって組織されていた。マカバイ家は、ユダ, ヨナタン, シモンといった兄弟らに指揮権が受け継がれ, シモンによってセレウコス朝から独立したハスモン朝は立てられた(前 142 年)。

¹⁴ 敬虔派とは起源こそ不明ではあるが, 後期ユダヤ教の主流を作った集団である。特筆すべきことは, アンティオコス 4 世の迫害に苦しむユダヤにむけて黙示文学ダニエル書を著わしていることであろう。反乱勢力であるマカバイ党との関連から, 中央の政治勢力と結び付いていたユダヤ教とは隔たりのある集団であったと考えられる。彼らの信仰的特徴として, 律法に対する厳格な姿勢が挙げられる。M. ヘンゲル, 前掲書, 289-295 頁を参照。

¹⁵ 敬虔派の著わしたダニエル書は, マカバイ家に対して「僅かの助け」という表現しかしておらず, マカバイ家の武力行使による反セレウコス運動を積極的に評価していない。それはダニエル書の持つ制約—内容がアンティオコス 4 世の迫害を示していることを, セレウコス朝側に知られてはならない—に起因することも考えられる。そのため, 「マカバイ家の働きを詳細に描写することは, 敬虔派の著者にとり, 非常に危険であったため, 敢えて消極的な描写に留めた」という推測は, 的を外しているとは言えない。M. ヘンゲル, 前掲書, 287 頁, H. リングレン, 荒井章三訳『イスラエル宗教史』教文館, 1976, 391 頁を参照。

¹⁶ マカバイ記一はアレクサンドロス大王の東方遠征と死から後継者の争いに短く触れた

対して、敬虔派によってマカバイ反乱初期に成立した黙示文学ダニエル書がある。本論は境界線を検討するために、ダニエル書に焦点をあてたい。

ダニエル書はアンティオコス 4 世の迫害に苦しむユダヤ教徒を激励する為に書かれ、反セレウコス朝の宣言書という性格を内包している¹⁷。非政治的であったダニエル書がどのようにして敬虔派以外のユダヤにも公表され、マカバイ反乱に関わったかについて明確な答えはない。しかし、ダニエル書はアンティオコス 4 世の迫害期に成立し¹⁸、敬虔派の信仰は後期ユダヤ教の主流を形成していく¹⁹。つまり、敬虔派と呼ばれるユダヤ教集団は、マカバイ反乱の担い手を精神的に支える集団であったと考えられる。したがって、ダニエル書の研究によって、迫害を生きたユダヤの精神性の考察が可能となる²⁰。

第 2 節 研究史

次に、研究史における問題の所在を明らかにしていきたい。

アンティオコス 4 世の迫害に関する研究書として、まず M. ヘンゲルの『ユダヤ教とヘレニズム』²¹を取り上げる。これはヘレニズム期におけるユダヤ教

後、アンティオコス 4 世エピファネスの即位（前 175 年）からハスモン朝のヨハネ・ヒルカノスの即位（前 134 年）に至る約 40 年に及ぶパレスチナにおけるユダヤとセレウコス朝の争いを記している。ハスモン家（マカバイ家）の功績を讃え、ハスモン家による世襲を正当化する意図が認められる。前 134-124 年にヘブライ語で記されたが、現在はギリシャ語が残っている。マカバイ記二は、マカバイ記一と平行する歴史を別の視点から記した歴史書である。キュレネのヤソンと呼ばれるユダヤ歴史家の 5 巻本の歴史書を編者が 1 巻に要約したもので、原語はギリシャ語である。旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』教文館、2001、1108-1109 頁を参照。

¹⁷ R. H. ファイファー、高橋虔訳『旧約聖書緒論 V』新教出版社、1964、233-238 頁を参照。

¹⁸ マカバイ記一・二は後世に成立した歴史書である。

¹⁹ 敬虔派の信仰は全ユダヤに広まったわけではない。しかし、敬虔派はファリサイ派やエッセネ派の起源であるとされ、その信仰は民衆に広く浸透したと思われる。

²⁰ これは敬虔派を中心とした精神性である。

²¹ 1969 年にドイツのテュービンゲンで初版が出版された。続いて第 2 版が 1973 年に出版され、1983 年に長窪専三によって原書第 2 版の日本語訳が出版された。M. ヘンゲル、長窪専三訳『ユダヤ教とヘレニズム』日本基督教団出版局、1983。（Hengel, M., *Judentum und Hellenismus*, Tübingen, J.C.B. Mohr, 1973.）

を、膨大な史料分析によって考察した大著である。しかし、ヘンゲルの『『迫害』の背景には、ギリシャ改革派と呼ばれたユダヤの存在があり、彼らの宗教的マイノリティとしてイデオロギーが存在するのだ』という結論は、宗教的な要因に偏りすぎている²²。古代においては、宗教的行為と政治及び経済的行為が密接に結びついていたと考えるのが妥当であろう。

次に、大戸千之『ヘレニズムとオリエント』²³を取り上げる。大戸はマカバイ反乱を「ユダヤが異文化を受容するか否かに差し迫って問うた事件」²⁴として扱い、ギリシャ・マケドニア系の王朝に支配されたオリエントの立場から考えるヘレニズムという時代を描き出している。また、一連の事件を「異文化受容の問題」としても扱っている。そのため、社会的な動向や文化面に関して基本的文献となっている。しかし、「一連の事件は社会的なユダヤ共同体の制度や体系のみならず、彼らの精神性²⁵—信仰心の在り方—も論じていく必要がある」とするべきであろう。

つまり、宗教・政治・経済の流れを把握し関連付けた上で、迫害の考察を行う必要がある。その際に、迫害のあらましのみならず、ユダヤの精神性を明らかにしていく必要もある。なぜなら、ユダヤの精神性こそが一連の事件を迫害と解釈させたからである。そこで、ダニエル書を中心に据え、ユダヤ共同体が危機に瀕した時代を精神的に支えたユダヤ集団の異文化受容の境界線を解明していきたいのである。

²² ギリシャ改革派と呼ばれるユダヤに、迫害の要因を求めたのはピッカーマンの研究からである。ヘンゲルは「ギリシャ改革派は早くにギリシャ宗教に改宗しており厳格なユダヤから諸々の迫害を受けていた」という。そのような時に、「セレウコス朝の意を得ることに成功したギリシャ改革派が、それまでの迫害を払拭するかのよう、他のユダヤを宗教的に迫害し始めた」ともいう。M. ヘンゲル、前掲書、459頁を参照。

²³ 日本で1993年に出版された。W. W. ターンの『ヘレニズム文明』がオリエントのギリシャ化に重点を置いているのに対し、『ヘレニズムとオリエント』はセレウコス朝に支配された地域ごとの考察を行っている。そうすることで、ヘレニズム王朝下で起こった事件やあらましを、ギリシャ文化を受容したアジア側の立場を重視している。大戸千之『ヘレニズムとオリエント』ミネルヴァ書房、1993。

²⁴ 大戸千之、前掲書、277-278頁

²⁵ ここでいう精神性とは、史学的手法では語り尽くすことのできない、人間の内面に迫った事柄のことである。

第 3 節 方法と課題

(1) ダニエル書—史料として—

ここでは、ダニエル書の持つ特性に触れ、史料としての妥当性と限界性を明らかにしたい。

ダニエル書をアンティオコス 4 世の迫害に関する史料とすることが困難な第 1 の要因は、オリジナルテキストの現存しないことにある²⁶。そのため、分析対象として聖書研究に広く用いられる Biblia Hebraica Stuttgartensia (以下 BHS と略記する)²⁷を用いる。オリジナルテキストが現存しないことを考慮しつつ BHS を研究対象とすることは、必ずしも的を外してはいない。BHS は学術的成果であり、研究の底本として扱われてきた実績があるからである。

第 2 の要因として、歴史書ではなく黙示文学であることが挙げられる。したがって、歴史書のように登場人物の実名が記される事はなく、正確な地名や年代も書かれているわけではない²⁸。ダニエル書から歴史の正確な情報を取得することは難しいのである。また、ダニエル書は敬虔派による偏った視点で構成されている。敵対関係にあったセレウコス朝やセレウコス朝に追従するヘレニズム改革派ユダヤの立場には全く理解を寄せていない。敬虔派に反する立場であれば峻拒する姿勢である。ダニエル書の記述が非常に偏ったものであり、アンティオコス 4 世に関する記述に誇張が含まれている事は、考慮されなければならない²⁹

²⁶ 最古のテキストは、レニングラード写本といわれる 10 世紀のものである。死海写本はイザヤ書の他は完全なテキストは無く断片が多い。

²⁷ W. Baumgartner, W. Rudolph, *Daniel Esra Nehemia*, Württembergische Bibelanstalt, 1976.

²⁸ ダニエル書は舞台設定が前 6 世紀である。しかし、成立は前 2 世紀 (前 167-164 年) とされている。ダニエル書の中にもネブカドネツアルなどの王名は登場する。しかし、これらは全てダニエル書の物語の舞台設定である前 6 世紀の登場人物である。それに対して、ヘレニズム期のアレクサンドロス大王やアンティオコス 4 世の実名は登場しない。

²⁹ 田中穂積「アンティオコス 4 世エピファネスとゼウス・オリュンピオス」『西洋古典學研究 29』日本西洋古典学会, 1981, 74-84 頁を参考。

しかし反面、誇張や主張に満ちているからこそダニエル書から敬虔派の精神性が読み取れるともいえる。

(2) 研究方法

次に、史料から境界線を導き出すための方法を考えたい。

まず、ダニエル書は 12 章から構成されているが、アンティオコス 4 世の迫害の記述が詳細な 11 章に焦点を絞ることにしたい。11 章の歴史性は史学研究において一定の評価を得ている³⁰。そこで、ダニエル書 11 章における迫害の記述は、歴史的手法によって分析が可能なのである。ただし、オリジナルテキストの存在しないダニエル書を歴史史料として取り扱うために、聖書批評を徹底して行う³¹。

そこで、迫害の中から分析する具体的な歴史的事件についてである。ここでは、11 章に記述があり、歴史的事件でもある、ゼウス像安置に注目したい。ギリシャ改革の中で何故ゼウス像安置なのか。それは、この事件が境界線を越えたと考える為である。また、11 章が他のギリシャ改革に対しては静観しているのに対し³²、ゼウス像安置に対しては強烈的な批判精神を読み取れる。

さらにこの精神性を、ある当事者の思想として位置付ける。ゼウス像安置事件とは敬虔派ユダヤ教徒にとって何であったのか。ユダヤにおいてゼウス像の持つ意味と、ユダヤが祭儀共同体であったことを考慮し、彼らの精神性の解明を試みる。また、彼らの宗教祭儀に注目しユダヤ共同体と祭儀の関係を明らかにすることによって、ヘレニズムにおけるユダヤの異文化受容の一つの境界線を検討したい。本論を通して注意したのは、社会的な動向を明らかにした上で、テキストの持つ意味を捉えたことにある。

³⁰ 田中穂積「ダニエル書 11 章について—支配者の驕慢と流神」『人文論究 35 (3)』関西学院大学, 1985, 47-67 頁を参照。

³¹ ダニエル書は、前 6-2 世紀に至る歴史の要約を事後予言の形で難解に抽象的に語る。ファイファー、前掲書、215-223 頁を参照。

³² エルサレムにおける体育競技場や青年訓育場といったギリシャ風の建設物の建立に関しては言及がない。ただし、ダニエル書以外の史料（マカバイ記一・二）には批判的記載がある。マカバイ記一 1 章 14 節、マカバイ記二 4 章 9 節を参照。

第 2 章 ダニエル書 11 章—「天の主」を中心に—

第 2 章においては、アンティオコス 4 世の迫害に境界線を越える何があったのかを焦点として論を進める。この問いは、最も対立を深めたゼウス像安置事件で検討できる。そこでダニエル書 11 章全体を捉え、その中で 11 章 29-35 節に注目する。この記述に、ゼウス像安置の描写があるからである。

第 1 節 テキスト分析

(1) ダニエル書 11 章と迫害

ダニエル書 11 章は、10-12 章とまとまった 1 つのストーリーの中に置かれている。ダニエルの祈りの場に守護天使ガブリエルが現れ (10 章)、ダニエルに真理を啓示し (11 章)、終わりのときが語られる (12 章)。11 章でガブリエルによって啓示された真理とはペルシャ支配に続くヘレニズムの支配とアンティオコス 4 世の迫害であり、一連の歴史がパノラマ (全景) 的に描かれている。

次に、11 章における歴史描写を検討する。11 章はキュロス王からアンティオコス 4 世即位前までの約 360 年を凝縮した前半部分 (2-20 節) と、アンティオコス 4 世の即位からその最期の約 10 年を詳細に描いた後半部分 (21-45 節) に分けられる。この区分のうち、本論は迫害に関する考察を行うため、アンティオコス 4 世の治世における記述を分析対象とする。そこで、後半部分 (11 章 21-45 節) をさらに 4 部 [「王の即位」(11 章 21-28 節), 「王の迫害」(11 章 29-35 節), 「王の驕慢」(11 章 36-39 節), 「王の終り」(11 章 40-45 節)] に分ける。アンティオコス 4 世の治世全体 (11 章 21-45 節) は対象とするが³³、直接分析するのは「王の迫害」(11 章 29-35 節) となる。その際、史実としての迫害とダニエル書における迫害記述の関連に焦点を当てる。なぜなら、黙示文学の中に見られる歴史事実との関連からダニエル書に内包された精神性が浮かび上

³³ ダニエル書 11 章 37-38 節にはアンティオコス 4 世が高慢になり、セレウコス朝代々の王が拝してきたアポロを軽んじ、ゼウスを祀ったことを咎める記述がある。しかし、

がってくると考えられるからである。

(2) 王の迫害 (ダニエル書 11 章 29-35 節)

アンティオコス 4 世が迫害を行ったという記述ダニエル書 11 章 29-35 節の私訳を行う。

- 29) 定められた時に至り彼は再び南に侵攻するが³⁴,
 しかし初めのようにならず, 最後のようにもならない³⁵。
- 30) キッティム³⁶の船団が彼の内に侵攻し, 彼は脅かされた。
 彼は聖なる契約³⁷に対し怒りを覚え, そのままに行動する。
 また, 彼は聖なる契約を捨てた者たち³⁸に対し関心を寄せる。
- 31) 彼から軍隊が興り, 彼らは³⁹かの砦の聖所を穢し,
ターミード 常供の燔祭を廃止させ, ハッシクーツ・メシヨメーム 荒らす憎むべき者⁴⁰を据える。
- 32) そして契約に逆らう者らは⁴¹甘言を以て棄教させ,
 他ならぬ神を知る民は力強く行動する。

セレウコス朝の祖であるセレウコス 1 世もまたゼウス・セレウコスと称されており, セレウコス朝の神はアポロンとゼウスの二柱であったと考えられる。そのため, アンティオコス 4 世に対する批判は非常に狭い視野によって行われたことになる。M. ヘンゲル, 前掲書, 456-457 頁を参照。

³⁴ アンティオコス 4 世が第 2 次エジプト遠征を行ったことを指す。

³⁵ 岩波訳では「今回は前回とは様相が違ってくる」と訳されている。旧約聖書翻訳委員会訳『諸書』岩波書店, 2005. を参照。

³⁶ ローマ人に対する呼称として使われている。但し, マカバイ記一 1 章 1 節では, これはギリシャ人を意味している。

³⁷ 神とユダヤの間で結ばれた契約を意味する。

³⁸ ユダヤ教を棄教しギリシャ宗教に改宗したユダヤを意味すると思われる。

³⁹ 文脈からは節の主語である「彼からの軍隊」を指すことが確認できる。

⁴⁰ 「天の主」(バアル・シャメーン) を指す。東地中海沿岸で広く礼拝され, ギリシャのゼウスとも同定される神である。

⁴¹ 原文は「そして契約に逆らう者らは棄教させる」である。マソラ本文は, 「彼は棄教させる」(וַיִּתְּנֵם) と読めるが, 七十人訳ギリシア語訳旧約聖書およびラテン語訳ウルガタより「彼らは棄教させるだろう」(וַיִּתְּנֵם) が提案されてきた。主語に当たる「契約に逆らう者達」(תִּירְכֵי עֵישָׁרָם) が男性名詞の複数形であるため, この提案を採り, 「契約に逆らう者達〔彼ら〕は棄教させる」と訳した。

- 33) 他ならぬ民の中の知恵を以て行う者ら⁴²は多くの者を悟らせるが、
彼らはある期間、剣と炎、また捕囚と略奪で以て、躓かされる。
- 34) 躓かされた人々は僅かの助け手⁴³しか得ず、
多くの者が彼らに与するが、それは偽善を以てである。
- 35) かの知恵を以て行う者らの中には躓かされる者がある。
しかし、それは彼らの内で練り、清め、また白くされるためであり、
終わりの時⁴⁴までである。
なぜなら、定められた時には至ってないからである。

ダニエル書 11 章 29-35 節は、以下の歴史的な事件を背景にしている。

まず、迫害の記述はアンティオコス 4 世の第 2 回エジプト遠征⁴⁵から始まる。前回と様相が異なるという記述は、第 1 回エジプト遠征⁴⁶とは異なりローマの干渉によりエジプト侵攻を断念したことを意味している (29 節)。アンティオコス 4 世はアレクサンドリア近郊まで迫り、プトレマイオス朝の征服は目前であった。しかし、ローマの特使ポピリウスがアンティオコス 4 世にエジプトへの侵攻を止めるように迫り、アンティオコス 4 世はエジプトから撤退することを決め、憤怒と苦悶を胸に秘めながらシリアへと引き揚げた⁴⁷。アンティオコス 4 世のローマに対する屈従は、彼の死の噂と結び付いて、パレスチナやフェニキア諸都市 (前 3 世紀はプトレマイオス朝に属していた) の反セレウコス勢力

⁴² 敬虔派ユダヤのことと解釈される。ファイファー、前掲書、213 頁を参照。

⁴³ マカバイ反乱を主導したユダ・マカバイ及びマカバイ家を指す。ファイファー、前掲書、213 頁を参照。

⁴⁴ 黙示文学の特徴である終末論がここで示される。これは、迫害の時が神の介入により断絶されるという信仰に基づく。

⁴⁵ 前 168 年である。

⁴⁶ 前 170 - 前 169 年である。プトレマイオス朝の領土であったペルシウムを奪取した。その帰途、アンティオコス 4 世がエルサレムに入り略奪を働いた様は、ダニエル書 11 章 25-28 節、マカバイ記 1 章 16-28 節に記述がある。しかし、関連性が薄いので省略している。

⁴⁷ ポリュビオス、城江良和訳『歴史』京都大学学術出版会、2004、184-185 頁を参照。

を力付けた⁴⁸。パレスチナではヤソンが反乱を起こしエルサレムを占拠した⁴⁹。エジプトからシリアへ引き揚げる途上にあつたアンティオコス 4 世はエルサレムに立ち寄り、武力を以てエルサレムを占領し、ユダヤの監視と治安維持の為に軍隊をエルサレムに常駐させた (30 節)。

続く部分では、忠実なユダヤ教徒に対する迫害について述べられている⁵⁰。セレウコス朝から派遣された軍隊は、エルサレムの住民を殺戮し、建物を破壊させ、神殿の上に城砦^{アクラ}を強化し、守備隊を配置した。また、ユダヤ共同体の祭儀常供の燔祭^{タミード}⁵¹を廃し、神殿にゼウス像を安置し、ユダヤ教の神とゼウス神を同一視した (31 節)。ユダヤの中にはギリシャ宗教に改宗したギリシャ改革派^{ヘレニズム}がいたと考えられるが⁵²、厳格なユダヤ教徒は彼らと対立した (32 節)。敬虔派ユダヤは危機の中で力を尽くし、生命を代償とすることも厭わなかった (33 節)。マカバイ反乱におけるマカバイ家の活動は「僅かの助け手」と消極的な表現に留められており、ユダヤ全体がマカバイ反乱に積極的に参加してないことを暗示している (34 節)。そして、迫害の期間は定められているとされる。これこそ迫害に苦しむユダヤの希望であつた (35 節)。

(3) 歴史記述との比較

ダニエル書 11 章はユダヤがエルサレムで起こした反乱については語らず、

⁴⁸ M. ヘンゲル、前掲書、32 頁を参照。

⁴⁹ ヤソンとはアンティオコス 4 世により前 172 年に罷免されていた元大祭司である。ヤソンの反乱が迫害の契機となったことは、チェリコヴァーが論じている。V. Tcherikover, *Hellenistic Civilization and the Jews*, translated by S. Applebaum, Philadelphia and Jerusalem, 1959., p188. を参照。

⁵⁰ N. ポーチャース『ダニエル書：私訳と註解』関根清三訳、ATD・NTD 聖書註解刊行会、1980、253-255 頁を参照。

⁵¹ 常燔祭、すなわち日毎の朝夕に絶やさずささげる燔祭を指し、「常供の燔祭」と訳出した。ダニエル書 8 章 11、12、13 節、11 章 31 節、12 章 11 節。これは公的礼拝の重要な部分であり、神との正規の関係、すなわち神との理想的な関係の維持、また日毎の献身を象徴するものであつた。馬場嘉市編『新聖書大辞典』キリスト新聞社、1971、1124 頁を参照。

⁵² ユダヤの中にギリシャ改革を希求していた人々がいたことは確かである。しかし、彼らの全てがギリシャ宗教に改宗したという見解には疑問も残る。

「アンティオコス 4 世がローマによって受けた屈辱がユダヤに向けられた」と読むことができる (30 節)。事実、アンティオコス 4 世がローマに屈服すると、反セレウコス勢力が勢い付き、エルサレムでは反乱まで起きた。セレウコス朝の王は軍事行動を国内外に示し、領土に対する王権の行使を知らせていた⁵³。そのような王朝がローマに屈服し、反勢力の反乱に対しては、圧倒的な軍事力を用いて権威を示す必要がある。そうでなければ、勢いづいた反勢力は各地に飛び火しかねない。アンティオコス 4 世としては、エルサレムの反乱を軍事力で圧迫することで、領内を牽制する意図もあったのだろう。それにもかかわらず、ダニエル書 11 章では原因はローマに脅かされたアンティオコス 4 世の怒りにあるとしている。ここから、迫害に苦しむユダヤの主張が見えてくる。

そこで、ここで注目すべきことは 11 章 31 節にあるゼウス像安置事件である。32 節から 35 節の記述は、マカバイ反乱における描写である。ギリシャ改革派との対立、殉教の過酷さ、マカバイ党の活動などに関する様子は、曖昧な表現に留められている。その中であって、ゼウス像安置事件の描写は具体的である。

第 2 節 ゼウス像安置事件

迫害の極みと解釈されるゼウス像安置事件は、ダニエル書 11 章からどのように読み取れるのか。興味深いのは、迫害を実行したのはアンティオコス 4 世ではなく、王の軍隊であったという 31 節の記述である。この軍隊は、ユダヤを監視する為にセレウコス朝から派遣された軍隊を指している⁵⁴。無論、軍隊が独断で迫害を行ったとは考えられず、セレウコス朝の意志を反映したと考えられる。しかし、彼らはユダヤ共同体と直接に接触した存在である。彼らの存在を迫害の中に位置づけることで、新たな局面が見えてくる。

ところで、セレウコス朝の軍隊はどのような構成員であったのか。ゼウス像の安置は、ギリシャ系兵士が多数いたことを意味するのであろうか。しかし、

⁵³ 柴田広志「シリア戦争をめぐる考察」『古代史年報 4』属州研究会、2006、11-16 頁を参照。

⁵⁴ N. ポーチャアス、前掲書、253 頁を参照。

この時期セレウコス朝はギリシャ系の軍人に不足しており、兵士の多くは地方から集められたシリア人であった⁵⁵。興味深いのは、シリア人が崇拝していたと考えられる「天の主」と呼ばれた神で、ゼウス神と同定されていた。

^{バアル・シヤメーン}天の主とは、前 10 世紀から後 2 世紀中葉まで、フェニキア人の勢力圏において礼拝された神である。フェニキア諸都市は古くからギリシャ諸都市との親交が深く、^{バアル・シヤメーン}天の主はゼウス・オリュンピオスと同定されていた。この神の崇拝は地中海を中心に広まっており、シリア人も^{バアル・シヤメーン}天の主を崇拝していたと考えられる⁵⁶。

この神は、11 章 31 節において^{ハツシクーツ・メシヨーム}荒らす憎むべき者と著わされている。つまり、ゼウス神と同定された^{バアル・シヤメーン}天の主がシリア人によって安置されたことが読み取れる。ユダヤ監視のためエルサレムに派遣されたシリア兵士が、彼らの祭儀を行える場を求めた事は十分に考えられる⁵⁷。シリア人の宗教祭儀の場としてユダヤの神殿が用いられたのであれば、^{バアル・シヤメーン}天の主の礼拝がそこで行われていたであろう⁵⁸。

しかし、この解釈だけでは「何故ユダヤの神殿がシリア人に解放されたのか」という問題が残る。

第 3 節 神々の混淆

(1) シンクレティズム

ここで検討したいのは、^{バアル・シヤメーン}天の主とユダヤの神がギリシャ改革を推進する

⁵⁵ 軍隊の構成員は雑多な起源であるが、大戸の研究において「シリア人」としていたため「シリア人」と一括りに記述した。この辺りの考察は不十分であるため、今後の課題としたい。大戸千之、前掲書、294 頁、Tcherikover, op.cit., p.194f. を参照。

⁵⁶ 前 2 世紀のフェニキア人史家によれば前 10 世紀には両者が同一であったことが伺える。つまり、ギリシャ神話のアフロディテやメソポタミヤ神話のイシュタルが愛の女神として同定されるように、「天の主」も、天空の神であるゼウス神と同定されていた。「なぜなら、彼らはそれを（すなはち、フェニキア人の間では天の主だがギリシアの間ではゼウスなるヘリオス）神と信じ、天の唯一なるペール・シェミーンと認めているからである。」M. ヘンゲル、前掲書、474 頁

⁵⁷ M. ヘンゲル、前掲書、453 頁を参照。

⁵⁸ 大戸千之、前掲書、294 頁を参照。

ギリシャ改革派ユダヤの間で同一視されていた可能性である⁵⁹。ペルシャ時代にユダヤは「天の神」というユダヤの神名を愛好しており、「天」という語だけで神の名の婉曲表現となり得ていた⁶⁰。アフラ・マヅダや天の主との同定を意味したにもかかわらずである⁶¹。ヘレニズム時代において「異なる神々は基本的に一つの神の現れにすぎない」とする宗教観がオリエントに広く存在した⁶²。これは、ギリシャ系の神々とオリエントの神々との習合によって、オリエント世界にギリシャ宗教を浸透させようとした支配層の思惑と捉えることができる。現に、上層部を中心にこの宗教観は広まっていた⁶³。

また、天の主との同定は、ユダヤにおけるギリシャ改革に対して深い意味を有していた。なぜならギリシャ改革派にとって、ギリシャと親交の深いシリア・フェニキア諸都市はギリシャ改革の模範であり、両者は密接に経済的・文化的接触を保っていたからである⁶⁴。エルサレムを中心に都市をギリシャ化し周辺諸都市との交易を活発に行えば、ユダヤは経済的に潤う。そこにユダヤの祭儀があるのは相応しくない。そのような思惑が、ユダヤの発展を望むギリシャ改革派にあったのではないか⁶⁵。

そこで、都市のギリシャ化を求めるギリシャ改革派とセレウコス朝から派遣されたシリア人の思惑が、天の主において重なってくる。これは推論である。しかし、ギリシャ改革派ユダヤがシリア・フェニキア諸都市と密接な交流を行っていたこと、天の主崇拜が両者に利となったことから、蓋然性は高い。また、ユダヤの神殿がシリアの兵士に解放された問題を解決するためにも、両者が天の主という共通の神を崇拜していたという仮説が必要となる。

⁵⁹ M. ヘンゲル, 前掲書, 453 頁を参照。

⁶⁰ M. ヘンゲル, 前掲書, 410, 811 頁を参照。

⁶¹ この時点で「天の主」はギリシャ-マケドニア系の神であるゼウス神と同定されていた可能性が高いことは、先に述べたとおりである。M. ヘンゲル, 前掲書, 475 頁を参照。

⁶² M. ヘンゲル, 前掲書, 418 頁を参照。

⁶³ M. ヘンゲル, 前掲書, 417-427 頁を参照。

⁶⁴ M. ヘンゲル, 前掲書, 474-475 頁を参照。

⁶⁵ 大戸千之, 前掲書, 322 頁を参照。

(2) 異なる祭儀

では、ユダヤの神殿が^{バアル・シャメーン}天の主を崇拜するシリア人に解放されたとして、どのような衝突があったのか。ユダヤ発展のためのギリシャ改革は、改革を迫害にまで進めた。

ダニエル書 11 章 31 節の記述に戻りたい。ここに読み取れるのは常供の燔祭^{ターミード}が廃止されたこと、神殿に^{バアル・シャメーン}天の主が奉じられたことである。常供の燔祭とは、ユダヤ共同体が神との契約に留まるために、欠かせない祭儀であった。では何故、常供の燔祭は廃止されたのか。それは、ユダヤ式祭儀がシリア・フェニキア諸都市からは迷信的で奇異に映ったために、ギリシャ的なシリア式祭儀が導入されたと推測される。また、シリア式祭儀が導入されたのであれば、無形の神を崇拜していたユダヤの神殿に有形の神「天の主」像（ゼウス像とも言える）が安置されたことと推測できる。律法により、ユダヤ教は固く偶像崇拜を禁じられていた⁶⁶。その偶像を神殿に奉じられたユダヤの憤りは、如何ばかりであったか。その憤りが、ダニエル書で^{バアル・シャメーン}天の主を「^{ハッシュクーツ・メシヨメーム}荒らす憎むべき者」と呼ばせた。

これらの同化政策が全てギリシャ改革派ユダヤによってなされたと断定はできない。ユダヤ共同体の中に、都市のギリシャ化を希求していたグループがあったとしても、有形の像を神殿に奉じることを進んで行ったとは考えがたいからである。ギリシャ改革派の存在は、エルサレムにギリシャ改革がなされた要因の一つではある。しかし、ある段階からギリシャ改革派の思惑を越え、セレウコス朝の意図が働いていたとするのが妥当である⁶⁷。

したがって、セレウコス朝から派遣されたシリア人の存在は、大きな役割を果たしていると思われる。

第 3 章 異文化受容の境界線

⁶⁶ 偶像の禁止は、イスラエルの神の像の作製と礼拝を禁ずるものである。しかし、ユダヤ教徒は異民族の礼拝祭儀に偶像崇拜を見出し、それらの神の礼拝の禁止と結び付けた。出エジプト記 20 章 4-6 節及び申命記 4 章 15-19 を参照。

⁶⁷ 大戸千之、前掲書、323 頁を参照。

シリア人との同化政策によりギリシャ的なシリア式祭儀が導入され、ユダヤ共同体の宗教アイデンティティを成す宗教祭儀が廃された可能性を述べてきた。ところで、宗教祭儀は敬虔派ユダヤの価値体系の軸であり、ここに彼らの境界線が存在した。そこで彼らの精神性を、その信仰の在り方を中心に論じていきたい。

第 1 節 アイデンティティの軸

敬虔派ユダヤに、宗教面以外でのギリシャ改革批判は見当たらない。例えばそれは、ダニエル書 11 章における大祭司ヤソンによってなされたギリシャ改革への沈黙から推測できる。前 175 年 - 前 172 年に大祭司職に在ったヤソンは、エルサレムにギリシャ風の建築物・^{ギムナジウム}・^{エフェベイオン}・体育競技場や青年訓育場を建立し、ギリシャ風の生活様式を持ち込んだ⁶⁸。しかし、ダニエル書に、ヤソンに関する記述はない⁶⁹。ヤソンのギリシャ化政策に対する、ダニエル書 11 章の沈黙は何を意味しているのか。それは、敬虔派ユダヤのヤソンのギリシャ改革に対する肯定も否定もしない反応である。つまり、都市がどれほどギリシャ化され、生活がギリシャ風になろうと、それは敬虔派の境界線には触れなかった。敬虔派はギリシャ改革の境界線を、宗教的な事柄でのみ鑑みていた。

11 章 31 節にはアンティオコス 4 世が聖なる契約に関心を寄せていたという描写がある。これは聖なる契約が脅かされたことを意味している。この契約こそ、神とユダヤ教徒の間で交わされたのであり、^{トラウ}契約に留まるためには律法の遵守が必要であった。敬虔派はこの契約を固く守ることによって、ユダヤとしてのアイデンティティを保とうとした。

⁶⁸ その様子はマカバイ記二に記されており、ヤソンがユダヤにギリシャ主義を奨励する様を「律法に反する」とし否定的に記述している。マカバイ記二 4 章 7-22 節を参照。

⁶⁹ 前 175 年 - 前 172 年に相当する記述はダニエル書 11 章 23-24 節にあるが、厳密に歴史的な事件を述べているわけではない。アンティオコス 4 世による侵略と略奪の様、それに略奪品を味方に分け与える様が度を越している事を記している。また、前述のヤソンの反乱に関しても沈黙している。ダニエル書 11 章 23-24 節及び N. ポーチャアス、前掲書、250-251 頁を参照。

第 2 節 反抗のイデオロギー

ダニエル書 11 章にて、ゼウス像は「^{シツクーツ・メシヨメーム}荒らす憎むべき者」と呼ばれているが、これは「^{バアル・シャメーン}天の主」の誤記であるとも言われる⁷⁰。ダニエル書において「荒らす憎むべき者」は 3 回⁷¹ 現れる。「主^{バアル}」が「^{シツクーツ}憎むべき者⁷²」に、そして「^{シャメーン}天」が「^{メシヨメーム}荒らす」にそれぞれ対応しており、シャメーンとメシヨメームは音が近い。しかし、シツクーツは宗教的な穢れと関連しており単なる誤記である可能性は低い。そこで、「^{シツクーツ・メシヨメーム}荒らす憎むべき者」は「^{バアル・シャメーン}天の主」を積極的に批判した表現であると考えられる⁷⁴。

「^{バアル・シャメーン}天の主」を「荒らす憎むべき者」と風刺した理由について、次のように考えられる。

一つは、「無形の神を崇拝していた敬虔派ユダヤにとり、有形の像を神殿に安置したことに対する『憤り』を表現した」という考えである。「^{シツクーツ・メシヨメーム}荒らす憎むべき者」はマカバイ記一⁷⁵ にも見られ、厳格的なユダヤ教徒の中ではある程度広まっていた風刺の可能性が高い。そのためこの言葉は、律法を遵守するユダヤ教徒にとって、耐え難い宗教迫害が行われていた証とも推測される。

さらに、「敬虔派ユダヤもユダヤの神を『^{バアル・シャメーン}天の主』と呼んでいた」という可能性がある。ギリシャ改革派が神を「^{バアル・シャメーン}天の主」と呼んだ可能性は指摘できなくも

⁷⁰ M. ヘンゲル, 前掲書, 473 頁を参照。

⁷¹ ダニエル書 9 章 27 節, 11 章 31 節, 12 章 11 節を参照。

⁷² バアルとは普通名詞の「主人」を意味するが、定冠詞が付いた時のみカナンの神の神名「バアル」という意味になる。Brown, F., et al, *The Brown, Driver, Briggs Hebrew and English lexicon*, Hendrickson Publishers, 2004., p.127. を参照。

⁷³ 旧約聖書に 28 回登場し、最多が 8 回のエゼキエル書である。特に、祭儀的・宗教的に汚れたものや行為において用いられる。エゼキエル書で類語「忌まわしい(行為)」と対で用いられる事が多く、エゼキエル書では常に複数形で用いられる。異教崇拝を指す場合と偶像の類を指す場合がある。イザヤ書 66 章 3 節やエレミヤ書では「忌まわしい物」という意味である。

⁷⁴ しかしまた、黙示文学の制限により「天の主」と表記できないために「^{シツクーツ・メシヨメーム}荒らす憎むべき者」と表記したとも考えられる。M. ヘンゲル, 前掲書, 473 頁を参照。

⁷⁵ マカバイ記一 1 章 54 節。「さて、第百十五年のキスレウの月の十五日に、王は焼きつ

ないが、敬虔派まで同様であった可能性は低い⁷⁶。しかし、ペルシャ時代にユダヤは「天の神」という神の呼称を有し、そのことはアフラ・マヅダヤパアル・シャメーン「天の主」との同定を意味していた⁷⁷。そうであるならば、「天の主」と呼ぶことに、敬虔派が危機感を有していた可能性は低い。けれども、有形の神が奉じられたことで、「天の主」と区別するために「荒らす憎むべき者」シククーツ・メシヨメームと呼ばざるを得なくなった。いずれにしても、有形の像に対する憤りと考えられる。

無形の神を崇拜するユダヤにとって、神々の同定が忌避すべきものであったとは考え難い⁷⁸。具体的な神殿における宗教的な営みを続けることにこそ、敬虔派ユダヤは共同体のアイデンティティを見出していた。祭儀共同体であるユダヤの在り方と矛盾していないことに、一定の蓋然性が求められる。また、エルサレム神殿がマカバイ反乱によりマカバイ家に奪取されると、かつて神殿が穢されたのと同じ日に清めの儀式が行われた。ゼウス像パアル・シャメーン（天の主）は取り除かれ、再びユダヤ教の聖所として奉献された。これは宮清めの祭りと呼ばれ、現代のユダヤにおいても祝われている⁷⁹。この祭りの背景に、「荒らす憎むべき者」シククーツ・メシヨメームに対する凄まじいイデオロギーが内包されている。

第 3 節 同化するアイデンティティ

ユダヤのアイデンティティが脅かされる事件があったことは確かである。それは単に、ギリシャ宗教の神をユダヤの神殿に祀ったのではない。セレウコス朝の進める同化政策により、ユダヤはシリア人と同化することを求められ、祭儀すら廃されたのである。それに反抗する敬虔派が、セレウコス朝の王である

くす捧げ物の祭壇上に『荒廃をもたらず憎むべきもの』を築き、また周囲のユダの町々に異教の祭壇を築いた。』フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書：原文校訂による口語訳』サンパウロ、2011、(旧) 1114 頁

⁷⁶ M. ヘンゲル、前掲書、475 頁を参照。

⁷⁷ M. ヘンゲル、前掲書、410 頁を参照。

⁷⁸ ユダヤの神と他の神の同定は、ヘレニズム時代以前に既に生じていた。M. ヘンゲル、前掲書、475 頁を参照。

⁷⁹ ハヌカ祭。ユダヤ歴キスレウの月の 25 日から 8 日間行われる祭りである。八枝の燭台に毎夜一灯ずつ蠟燭を灯し加えていく。

アンティオコス 4 世を迫害者としてダニエル書に描いた。

先行研究で指摘されているギリシヤ改革派の存在もある。ユダヤ式祭儀がシリア人の礼拝する天の主と習合的に改革されていった背景には、ギリシヤ改革派によるユダヤと非ユダヤとの同化が推定される⁸⁰。しかし、先行研究で指摘されているほどに、ギリシヤ改革派が迫害を主導していたとするのは行き過ぎであろう。これはマカバイ記一 1 章 41-42 節からも伺える。

次いで王は、王国のすべての者に対して、すべての者が一つの民となるために、各々自分の習慣を捨てるよう書き送った。

これは王であるアンティオコス 4 世が個人的に命じたものではない。徹底的なシリア・フェニキア諸都市との同化への用意をしたギリシヤ改革派が、ユダヤの神を「天の主」と同一視した時に同化政策を推し進めたのだと推測される⁸¹。しかし、偶像崇拜をギリシヤ改革派がどのように認識していたかにもよるが、全ての改革がギリシヤ改革派によって主導されたわけではない。また、アンティオコス 4 世はマカバイ反乱を代理に任せていた⁸²。そのため、アンティオコス 4 世の代理である軍隊も迫害を主導していたのである。

しかし、天の主（ゼウス像）の安置がダニエル書 11 章に描かれていることに注目したい。そのことにより、共同体或いは個人のアイデンティティにおいて、宗教アイデンティティが深く関わっていることを示す事例となるからである。

第 4 章 同化政策とアイデンティティ

ダニエル書 11 章で焦点となったのは、境界線とアイデンティティであった。宗教的な営みを奪われることが、敬虔派ユダヤにとっての異文化を受容する上

⁸⁰ M. ヘンゲル, 前掲書, 453 頁を参照。

⁸¹ M. ヘンゲル, 前掲書, 452-453 頁を参照。

⁸² マカバイ記一 3 章 27-37 節を参照。

での境界線であると論じた。境界線は、異文化と衝突することがなければ意識されることはない。このような問題は、現代社会におけるどのような問題と繋がっているであろうか。

第 1 節 現代における同化政策

前 2 世紀、パレスチナはユダヤのみが生活していたのではなかった。セレウコス朝から派遣された役人や兵士らと雑居しており、ギリシャ改革はエルサレムの統一を促した。多民族が混在する国家において、同一の国家に属する一員であるというイマジネーションを抱かせるために、一つのアイデンティティを創造する政策は必然である。しかし、境界線を見ない同化政策は反発を生み、その反発がイデオロギーとなって紛糾するという事態が生じた。

同様の事件は現代においても広く生じている。近代以降、「国民国家」という帰属意識によって国民を統合してきた国家の枠組みが揺らぎ始めている。その根本にあるのは、国家という名の下に、搾取を余儀なくされてきたマイノリティの存在がある。それは、国民国家の創造するアイデンティティから取り残されてきた人々である。

近年の同化政策で最も大きな事件へと発展したのは、中国における少数民族への漢化ではなかろうか。例えば、ウイグル族のほとんどがスンナ派のイスラム教を信仰しているが、中国政府によって宗教に否定的な政策が実施されている。彼らが恐れているのは、開発主導を漢族に占められ、経済的な負担を強いられることばかりではない。民族としてのアイデンティティを担う、文化や言語そして宗教が廃れることにも危機感を抱いていたのである⁸³。

スコットランドでは、中央政府の承認を得て英国からの分離独立の是非を問う住民投票が実施された。人材や資源はロンドンに吸収され、スコットランドとイングランドの格差は広がるばかりで、スコットランドの言語や文化は廃れ

⁸³ 中国におけるウイグル族の同化政策については以下を参照。石田耕一郎「中国の少数民族 母語の保護に協力しよう」『朝日新聞』2014年1月10日、朝刊、オピニオン2、18頁

ていく。独立の気運が高まった要因としては、経済的な豊かさを求めたことが挙げられる。しかし、それを支えたのはスコットランド人のアイデンティティであろう。スコットランドの住民投票は、欧州の分離独立運動を刺激し、スペインのカタルーニャ州で分離独立を問う住民投票がスペイン政府の承認は得ずに実施された。ユーロ危機で広がった不満が8割の独立賛成に繋がった。スコットランドとカタルーニャにおける独立運動は、欧州全土に影響を与えている⁸⁴。

今話題となっている、アイヌや沖縄におけるアイデンティティの高まりも同様である。日本という国民国家に統合され、文化・言語・宗教に基づいたアイデンティティを、同化政策により蔑ろにされてきたのである。彼らのアイデンティティは日本という国民国家に融和されようとしている。彼らが自らのアイデンティティを叫び、同化に抗うのは当然のことだ⁸⁵。

以上のような例は、多くの類例が挙げられよう。ここでは、同類の事件が世界各地で生じていると言及するに留めたい。

第 2 節 終結と希望に向けて

国家による力の支配には限界があることが、近年続く民族や宗教の対立から明らかとなった。民族を統合する国民国家の流れは、国民よりも小さな枠組みである民族に自治権を持たせることで危機を乗り切ろうとする。イギリスからの独立を住民投票で問うたスコットランドがその例と言えよう。思想と言論の統制を強化するような政策は、かえって民族の反発を触発し、争いの連鎖を繰り返すという事態になりかねない。問題解決に向けて政策の転換が求められて

⁸⁴ スコットランドとカタルーニャなどの欧州における独立運動については以下を参照。渡辺志帆「300年の連合、選択は スコットランド住民投票」『朝日新聞』2014年9月19日、朝刊、1外報、11頁、青田秀樹「カタルーニャ、独立へ強硬 正式な住民投票を要求」『朝日新聞』2014年11月11日、朝刊、1外報、11頁

⁸⁵ 日本における同化政策については以下を参照。「(耕論) 揺らぐ国民国家」『朝日新聞』2014年10月4日、朝刊、オピニオン1、15頁、木村司/奥村智司「『沖縄の誇り』浸透 翁長氏、対本土前面に党派超えた国への怒り」『朝日新聞』2014年11月17日、朝刊、1社会、35頁、山吉健太郎「札幌市議『アイヌ民族もういない』、発言の根っこには」『朝日新聞』2014年10月15日、朝刊、3社会、37頁

おり、政府の手腕が試される。

では、どのような政策が求められるか。これらのアイデンティティは数値化が困難である。そのため、数値的根拠を求めるやり方では、これらのアイデンティティを顧みることに限界がある。

ここで、ダニエル書 11 章 35 節の終わりの時について触れたい。終わりとは、本来「切る」が名詞化した単語である⁸⁶。つまり、ダニエル書で言及される終わりとは、宗教的アイデンティティが奪われ、非暴力主義であるにもかかわらず戦いに身を投じるといふ苦難の時が、神の介入により断ち切られる事を意味している。これは、苦難の中にあっても希望を見出すという精神性である。このような精神性を、敬虔派はダニエル書に著わし、迫害に苦しむユダヤを精神的に励まそうとした。このような人の精神性に寄り添う知恵こそが、現代人が抱える問題を解決していく上で、求められている。

結.

最後に、本研究で残された課題を挙げ、今後の展望を示したい。

迫害の記述があるダニエル書 11 章から、ヘレニズム期におけるユダヤの異文化受容の境界線を取り上げた。ダニエル書の著者が所属したのは敬虔派と呼ばれる集団であり、迫害期（前 167-164 年）に突如として脚光を浴び、その後のユダヤ教の主流となるファリサイ派とエッセネ派の源流ともなる集団である。しかし、ユダヤには様々な宗教集団が存在しており、他集団の中での敬虔派の位置付けを明確にしていく必要がある。また、シリア人の検討が不十分であり、ユダヤ内のシリア人の位置付けや、両者の祭儀の比較など残された課題は多い。

宗教アイデンティティの重要性については言及できたが、現代における宗教アイデンティティの問題との繋がり是不十分であり、現代の宗教アイデンティティ問題の具体的な解決案も提示できていない。

しかし、これまでの研究で取り上げられていなかったダニエル書による異文

⁸⁶ Brown, F., op.cit., p.891-892. を参照。

化受容の境界線について分析し、境界線と宗教アイデンティティの実態について明らかにすることはできた。また、あまり注目されることのなかったシリア人との関係を迫害の背景に位置づける事ができ、黙示文学として捉えられてきたダニエル書を史料として扱うことの一つの具体例を示せた。宗教アイデンティティが歴史に与える影響と、現代における宗教アイデンティティの軽視による諸問題との関連と解決への道を模索し、研究を発展させていく所存である。

おわりに

異文化受容の問題は、現代において欠かせないものであろう。しかし、日本人は宗教アイデンティティに関して鈍感になっている。自然科学主義の渦中において、致し方ないことでもあろう。けれどもこの鈍感さは、多くの民族や共同体の持つ各々のアイデンティティの軽視にも繋がってくる。そのため、日本のマイノリティが持つアイデンティティにも鈍感であるし、近隣諸国のマイノリティの宗教アイデンティティが危機に瀕していても、何が問題なのかを理解できず危機感も持てない。

日本人としか交流しないのであればそれでもいいだろう。しかし、グローバル化によって、人やモノの動きは民族や国家を超え行き来するようになった。異文化の境界線を意識しないのであれば、それは異文化圏の人間のアイデンティティを否定することにもなりかねない。また、自己の境界線を把握していないのであれば、それは自らのアイデンティティを損なうことにもなる。経験や価値観、そして非合理的な人間の心の在り様を、自然科学の言語運用は顧みない。その洗礼を受けた現代日本においては、文化や宗教といった価値観から生ずる境界線に鈍感にならざるを得ない。日本人にも境界線が存在するにも拘わらずである。まずは、同化政策に悲鳴を上げる声に耳を傾けることから始めたい。

参考文献

〈史料〉

W. Baumgartner, W. Rudolph, *Daniel Esra Nehemia*, Württembergische Bi-

belanstalt, 1976.

〈基本文献〉

- R. H. ファイファー, 高橋虔訳『旧約聖書緒論 V』新教出版社, 1964.
 H. リングレン, 荒井章三訳『イスラエル宗教史』教文館, 1976.
 N. ポーチャアス, 関根清三訳『ダニエル書: 私訳と注解』ATD・NTD 聖書注解刊行会, 1980.
 G. フォン・ラート, 荒井章三訳『旧約聖書神学』日本基督教団出版局, 1980.
 M. ヘンゲル, 長窪専三訳『ユダヤ教とヘレニズム』日本基督教団出版局, 1983.
 田中穂積「ダニエル書 11 章について—支配者の驕慢と洗神」『人文論究 35 (3)』47-67, 関西学院大学, 1985.
 H. G. キッペンベルク, 奥泉康弘 / 紺野馨訳『古代ユダヤ社会史』教文館, 1986.
 W. W. ターン, 角田有智子 / 中井義明訳『ヘレニズム文明』思索社, 1987.
 F. W. ウォールバンク, 小河陽訳『ヘレニズム世界』教文館, 1988.
 大戸千之『ヘレニズムとオリエント: 歴史のなかの文化変容』ミネルヴァ書房, 1993.
 J. L. メイズ編, 荒井章三 [ほか] 日本語版編集『ハーバー聖書注解』教文館, 1996.
 ポリュビオス, 城江良和訳『歴史』京都大学学術出版会, 2004.
 F. シャム, 桐村泰次訳『ヘレニズム文明』論創社, 2011.
 Tcherikover, V., *Hellenistic Civilization and the Jews*, translated by S.Applebaum, The Jewish Publication Society of America and The Magnes Press, The Hebrew University., Philadelphia and Jerusalem, 1959.
 Hengel, M., *Judaism and Hellenism : studies in their encounter in Palestine during the Early Hellenistic Period*, translated by John Bowden, SCM Press, London, 1974.
 Bickerman, E.J., *The God of the Maccabees : studies on the meaning and origin of the Maccabean revolt*, translated by Horst R. Moehring, Brill, Leiden, 1979.
 Bickerman, E.J., *Studies in Jewish and Christian history : a new edition in English including "The God of the Maccabees"*, introduced by Martin Hengel, edited by Amram Tropper, Brill, Leiden, 2007.

〈参考文献〉

- E. L. エールリッヒ, 馬場嘉市 / 馬場恵二訳『イスラエル史: 原始から神殿破壊 (後 70 年) まで』日本基督教団出版部, 1962.
 D. S. ラッセル, 八田正光訳『聖書の中世時代: 後期ユダヤ教の歴史・文学・思想』ヨルダン社, 1968.
 馬場嘉市編『新聖書大辞典』キリスト新聞社, 1971.
 M. ノート, 樋口進訳『イスラエル史』日本基督教団出版局, 1983.
 M. メツガー, 山我哲雄訳『古代イスラエル史』新地書房, 1983.
 W. H. シュミット, 山我哲雄訳『歴史における旧約聖書の信仰』新地書房, 1985.
 W. F. オールブライト, 十時英二 / 戸村政博訳『パレスティナの考古学』日本基督教団出版局, 1986.
 H. ケスター, 井上大衛訳『ヘレニズム時代の歴史・文化・宗教』新地書房, 1989.

- H. ケスター, 井上大衛訳『ヘレニズム時代の歴史・文化・宗教』新地書房, 1989.
- J. ブルクハルト, 新井靖一訳『ギリシア文化史』筑摩書房, 1991.
- H. クレンゲル, 五味亨訳『古代シリアの歴史と文化:東西文化のかけ橋』六興出版, 1991.
- 土岐健治『初期ユダヤ教と聖書』日本基督教団出版局, 1994.
- 月本昭男『聖書の風土・歴史・社会』日本基督教団出版局, 1996.
- 歴史学研究会編『古代地中海世界の統一と変容』青木書店, 2000.
- 旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』教文館, 2001.
- R. E. クレメンツ編, 木田献一/月本昭男監訳『古代イスラエルの世界:社会学・人類学・政治学からの展望』リトン, 2002.
- 旧約聖書翻訳委員会訳『諸書』岩波書店, 2005.
- T. C. レーマー, 山我哲雄訳『申命記史書:旧約聖書の歴史書の成立』日本キリスト教団出版局, 2008.
- フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書:原文校訂による口語訳』サンパウロ, 2011.
- Collins, J.J., Sterling, G., editors, *Hellenism in the land of Israel*, University of Notre Dame, Indiana, 2000.

〈辞典類〉

- 小林洋一編訳『BHS のマフテアハ』ヨルダン社, 1999.
- Gesenius, W., Kautzsch, E., Cowley, A. E., *Gesenius' Hebrew grammar*, Oxford, 1910.
- Even-Shoshan, Avraham, *A New concordance of the Bible : thesaurus of the language of the Bible Hebrew and Aramaic roots, words, proper names phrases and synonyms*, Kiryat Sefer, 1993.
- Brown, F., et al., *The Brown, Driver, Briggs Hebrew and English lexicon*, Hendrickson Publishers, 2004.



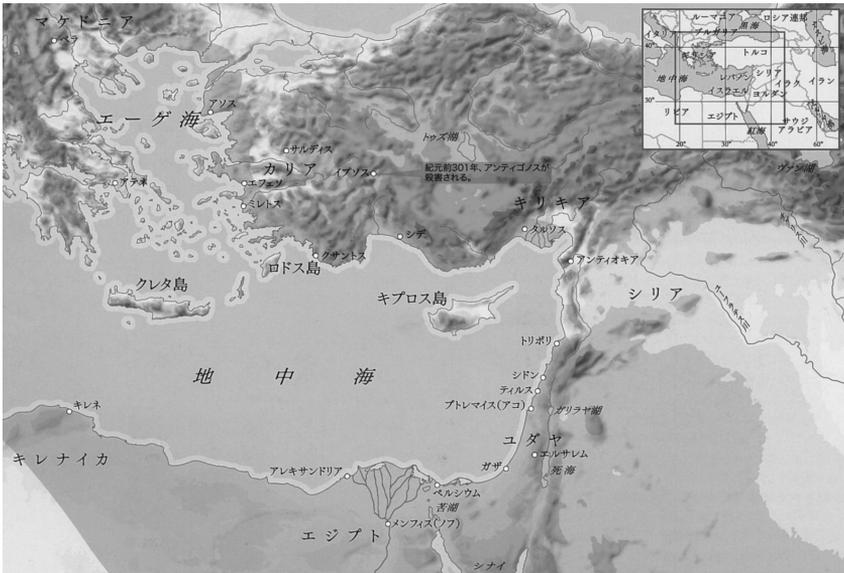
【図 1】

《アンティオコス 4 世胸像》

旧博物館所蔵（ベルリン）

紀元前 175 年頃制作

- 1) 情報は旧博物館のキャプションを参照
- 2) 写真は執筆者による撮影



【図 2】

《ユダヤ周辺地図》

- 1) 「プトレマイオス 1 世統治下の領土」バリー・J. バイツェル監修，山崎正浩他翻訳『地図と絵画で読む聖書大百科』創元社，2008.

〈謝辞〉

本研究を進めるにあたり、ゼミの指導教官である本学 塩野和夫教授より、献身のご指導を頂いたことに対して心より感謝申し上げます。また、研究全般にわたる多大なご指導を賜りました今井尚生教授に深く感謝しております。そして、ヘブライ語の私訳についてご協力いただきました本学神学部・神学科 日原広志准教授に深く感謝いたします。

本論文の一部は、本学国際文化研究科院生のスキルアップに関する実践的取り組みによります。

最後になりますが、論文作成にあたり貴重なご助言を頂いた先輩、最後まで一緒に頑張ってきた研究科の同期の皆様、研究を支えてくれた後輩に心より感謝しております。